

研究論文

トロント大学オンタリオ教育研究所における教育実践家向け学位プログラム  
(M.Ed.・Ed.D.) 及び研究者向け学位プログラム (M.A.・Ph.D.) の  
類似点と相違点

—「リーダーシップ・高等・成人教育」研究科  
「教育リーダーシップと政策」プログラムを題材として—

平田 淳\*

Similarities and Differences between the Degree Programs for Practitioners and  
Scholars at the Ontario Institute for Studies in Education of  
the University of Toronto:

Focusing on the Educational Leadership and Policy Program of  
the Department of Leadership, Higher and Adult Education

Jun HIRATA

【要約】本稿は OISE の LHAE 研究科 ELP の学位プログラムについて、教育実践家向け学位 (M.Ed.・Ed.D.) と研究者向け学位 (M.A.・Ph.D.) の類似点と相違点を明らかにすることを通して、後に実施する現地調査での分析の視点を設定することを目的としている。

【キーワード】OISE, LHAE, ELP, M.Ed., M.A., Ed.D., Ph.D.

はじめに

本稿は、筆者の5か年科研費プロジェクト「カナダの大学院における教育専門職向け学位プログラムの教育効果に関する調査研究」2年目の調査対象であるトロント大学オンタリオ教育研究所 (Ontario Institute for Studies in Education of the University of Toronto: OISE/UT) の運営・研究組織や学位プログラムの概要について検討した拙稿『トロント大学オンタリオ教育研究所 (Ontario Institute for Studies in Education of the University of Toronto) における研究科と学位プログラム』(平田, 2020a) に続くものであり、当該拙稿の内容を踏まえたうえで、OISE の1つの研究科である「リーダーシップ・高等・成人教育研究科 (Department of Leadership, Higher and Adult Education: LHAE)」内の一専門領域である「教育リーダーシップと政策 (Educational Leadership and Policy: ELP)」における M.Ed. 及び Ed.D. プログラムの制度設計と諸特徴について検討することを目的とする。当該領域は、日本で言うところの教育行政学と学校経営学を併せたような内容を対象とするものである。OISE にはその他にも、応用心理人間発達学研究科 (Department of Applied Psychology & Human Development: APHD)、カリキュラム・ティーチング・ラーニング研究科 (Department of Curriculum, Teaching and Learning: CTL)、社会正義教育研究科 (Department of Social Justice Education: SJE) の3研究科があるが、その中でも LHAE の ELP を調査対象として選定した理由は、ELP がカバーする領域が筆者の専門領域と重なっており、現地でインタビュー調査等を行う際に筆者の教育行政学上の専門知識を活用することができると思われるからである。

\*佐賀大学大学院学校教育学研究科

## 1. LHAE 研究科及び ELP プログラム概要

LHAE 研究科は、「成人教育・コミュニティ開発プログラム (Adult Education and Community Development Program)」、「教育リーダーシップと政策プログラム (ELP)」、「高等教育プログラム (Higher Education Program)」の3つのプログラムから構成されている。また、「教育政策 (Educational Policy)」、「比較国際開発教育 (Comparative, International and Developmental Education)」、「職場学習と社会変容 (Workplace Learning and Social Change)」という、教育問題の発生と課題解決に対する学際的アプローチを促進する3つの協働的専門分野 (collaborative specializations) の拠点でもある。教育問題は公的教育環境の内外で生じるものであるため、LHAE は教育を広範に捉えている。そのため、LHAE のコースとプログラムは家庭や職場、地域コミュニティ、国内・国際的文脈といった異なる社会状況間の関係性を考慮に入れて設定されている。そして LHAE の研究と教育の全体を貫流するテーマは、エクィティ、社会正義、専門性教育、政策研究、教育リーダーシップと組織、成人学習である<sup>1</sup> (平田, 2020a)。

ELP プログラムは、PK-12 教育におけるリーダーシップと政策、変容、社会的多様性、倫理、価値観等に関する研究とそれらの開発に貢献しようとするものであり、思慮深く高度に熟練した教育者や管理職、政策分析者、学術実践家を養成するためにデザインされている。これら理論と実践のコンビネーションにより、学生は現在の教育政策や教育手続きが有する複雑な課題に取り組むことができるようになる。本プログラムにおいては、学生はこうした領域をより広範に探究したり、あるいは政策、リーダーシップ、変容、社会的多様性といった4つのテーマのうちの1つに焦点を絞ることとなっている<sup>2</sup>。

ELP の M.Ed.及び Ed.D.プログラムは、教育実践家が様々なレベルにおけるリーダーシップ・キャリアに備えられるようデザインされている。これら学位プログラムは、実践を行っている管理職が直面する課題を理解し解決することにおいて直接的な支援となる理論と研究といった要素に焦点を当てている。他方で M.A.と Ph.D.は、特に学問研究領域としての教育リーダーシップと政策に関心を有する学生向けのプログラムである。M.A.は Ph.D.進学を目指している卓越した学術的背景を有している者を対象としており、Ph.D.は大学等において研究職を目指している者にとって利益があるプログラムである (OISE, 2019)。

## 2. ELP 授業概要と研究領域ごとの推奨科目

### (1) ELP の授業概要

表1は、ELP プログラムで提供される授業の一覧及びその概要、表2は上述の4つのテーマに基づいて修得が推奨されている授業の一覧である。学生は、それぞれが取得を目指す学位プログラムの要件を満たしつつ、研究領域における推奨科目を勘案しながら、自らの関心に基づいて所定の単位数の授業を履修し、修得を目指すこととなる。

表 1 ELP の授業概要

<p><b>LHA1003H リサーチ・プロポーザルをデザインする (修士) (Designing Masters Research Proposals)</b></p> <p>教育行政学における調査の実施を含む戦略や技術、課題について考察する演習である。本演習において受講者は、教育行政学における調査課題を明確にし、関連する先行研究をレビューし、リサーチ・プロポーザルを執筆し、調査を実施し、報告書を書く準備をする。本演習受講中に、受講者はMRPのためのプロポーザルを準備することになる。</p>
---

<sup>1</sup> <https://www.oise.utoronto.ca/lhae/About.html> (2019年7月7日採取)。

<sup>2</sup> [https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy/index.html](https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational_Leadership_and_Policy/index.html) (2019年7月7日採取)。

<p>注意：この授業は、オプション2（MRP）の M.A.及び M.Ed.の学生は必修である。パートタイム学生はこの授業をプログラムの終盤に履修することが望ましい。フルタイム学生は初年度に受講することが望ましい。</p> <p>担当：J. ガスケル（J. Gaskell），スタッフ</p>
<p><b>LHA1004H 教育リーダーシップと政策におけるリサーチ・リテラシー〔調査方法論〕（Research Literacy in Educational Leadership and Policy [RM]）</b></p> <p>本授業の目標は、受講者に対し教育リーダーシップ及び政策における調査の目的に関する入門的機会を提供し、教育者としての実践において、また大学院の学修において、調査を獲得、評価、解釈、活用するための方法を学習することにおいて支援することである。以下のような事項を扱う可能性がある。即ち、政策・リーダーシップ・変容に関する研究において用いられる異なる調査パラダイムや調査戦略の概観；調査の長所・短所を批判的に分析する方法；先行研究のレビュー及び参考文献一覧の作成の方法；調査の普及；調査・政策・実践間の繋がり；調査評価部門の役割；調査を資金援助し、指示し、活用し、コミュニケーションをとることにおけるリーダーシップの役割。</p> <p>注意：すべての修士の学生はプログラムの序盤に本授業を履修することが強く望まれる。</p> <p>担当：C. キャンベル（C. Campbell），A.K. クミエレウスキ（A.K. Chmielewski），スタッフ</p>
<p><b>LHA1012H 組織文化と意思決定（Organizational Culture and Decision-Making）</b></p> <p>教育組織の組織文化について分析する。組織文化に関連する調査や理論から生じる行動の含意について考察する。事例研究やフィールドでの体験が特定の組織文化の文脈における意思決定分析のための基礎として活用される。</p> <p>担当：スタッフ</p>
<p><b>LHA1016H 学校のプログラム開発と実施（School Program Development and Implementation）</b></p> <p>広範に異なる目的や価値観の観点における全体的な学校環境を概念化し、操作し、評価する際の課題について分析する。主要なトピックは、オンタリオ州やカナダ国内、国外の教育の文脈におけるプログラム開発や変容のための戦略；教育的環境を差異化する理論的経験的基礎；プログラム・マネージャーの役割、プログラム開発や組織・実行・評価を管理するために必要とされるスキル、等を含む。</p> <p>担当者：S. アンダーソン（S. Anderson）</p>
<p><b>LHA1018H 教育における政治的スキル（Political Skill in the Education Arena）</b></p> <p>学校における学校についての政治的問題の解決にける実践的検討を行う。その際、5つのレベルのローカル・ガバナンスに着目する。即ち、家庭－学校、学校内マイクロ・ポリティクス、近隣、メゾ・ポリティクス（学校と中央オフィス）、教育委員会、である。その際、環境や組織、権力といった背景変数に関する理解に特に着目する。連携構築（coalition-building）、支援（advocating）、新年、共同生産（coproducing）といったプロセスに関する課題をワークショップ活動の中心とする。手続きや小説、概念的な文献等を講読する。</p> <p>担当者：J. ライアン（J. Ryan）</p>
<p><b>LHA1019H 教育行政における多様性と倫理（Diversity and the Ethics of Educational Administration）</b></p> <p>教育におけるアドミニストレーターや教員は、計画においてエクィティに関する事項について決定を下し、相反する価値観に基づく地位の間を裁定し、異なる権利や人的利益を調整することを継続的に求められる。そうした領域における管理的実践はあまり成功していない。本授業は様々な倫理思想的学校や社会正義に対する現代的アプローチについて検討し、その内容を教育における管理的実践に応用する。人種や文化、ジェンダー、年齢、社会階級、国家的起源、言語、出自、性的思考、シティズンシップ、肉体的精神的能力といった領域におけるエクィティの問題に特に着目する。</p> <p>担当者：J. ポーテリ（J. Portelli）</p>
<p><b>LHA1020H 教員と教育的変容（Teachers and Educational Change）</b></p>

本授業は、教員がどのようにして管理的プロセスに貢献し、またそれに影響をうけるのかについて検討する。その際、教員の教室での戦略や教員の労働文化、キャリア、学校意思決定における教員の役割、（年齢や宗教的政治的信念、ジェンダー・アイデンティティといった）教員のより広い生活の諸視点に対する教育的関与、教育的変容を促進しあるいは抑制するに際しての教員の役割等に着目する。本授業は小・中等学校の教員及び教育組織の管理職にとって有益である。

担当者：N. バッシア（N. Bascia）

#### **LHA1024H 批判的会話：哲学、教育リーダーシップ、教育政策研究（Critical Conversations: Philosophy, Educational Leadership and Educational Policy Studies）**

教育リーダーシップ及び政策に関する研究において生じる課題を哲学的に探究する。例えば次のような事項を扱う。即ち、アドミニストレーションとリーダーシップに関する異なる概念；教育における権力と権限；批判的思考の役割；標準と多様性；学校における偏見；検閲と論争の問題；多元社会における学校教育の役割；教化と保護者の権利；コモン・スクールと分離学校等である。異なる哲学的立場を実践的状况に学生が応用できるようにするために、事例研究の方法を活用する。

J. ポーテリ（J. Portelli）

#### **LHA1025H 効果のある学校と学校改善（School Effectiveness and School Improvement）**

本授業は、学校風土や物理的特徴、教授パターン、組織のタイプ、時間の活用といった効果のある学校に貢献する要因について考察する。また、多元主義的民主主義の文脈や教育組織を改善するための全体品質管理（total quality management: TQM）の活用における学校改善の可能性についても検討する。

担当者：スタッフ

#### **LHA1026H 教育における専門職員の評価（Evaluation of Professional Personnel in Education）**

学校制度における教員や管理職の業績評価を取り巻く課題について考察する。その際、次のような事項を扱う。即ち、現在の評価実践、評価政策と手続き、法的文脈、政治的次元、雇用と職員の選択（recruitment and selection of personnel）等である。概念的背景を中心として職員開発へのシステム・アプローチについて検討する。カナダの学校における評価の実践的課題について批判的に議論する。

担当者：スタッフ

#### **LHA1030H 教育の法的文脈（The Legal Context of Education）**

現在の学校体験の実践的緊急性に関連する法的言説の現代的文脈について考察する。その際、制定法やコモン・ローを詳細に検討する。過失や背任行為、人権と学校制度、教員の権利、児童生徒のしつけ・青年犯罪者法（Young Offenders Act）・ゼロトレランスなどに特に着目する。

担当者：M.A. ズッカー（M.A. Zucker）

#### **LHA1035H 教育社会学（Sociology of Education）**

本授業は、教育社会学における現代の調査や理論、議論を幅広く提供するものであり、学校と社会の3つの重要な繋がりによって体系化されている。即ち、社会組織、選別（selection）、社会化である。本授業ではまた、文化や経済、不平等、社会的組織の新たな形態を理解するために中心となる、学校教育はどのようにして現代社会のコア組織となってきたのかについて考察する。本授業を通して、受講者はK-12と中等後教育両方における多くの教育的トピックに関する調査を実施する準備をすることとなる。そのため本授業では、特に過去30年以上の間、現代社会において教育を形成してきた傾向に焦点を当てる。授業内で行うほとんどの文献講読は北米の経験的社会学者によるものであるが、多くの国際的傾向にも目を向ける。

担当者：S. デイビース（S. Davies）

### **LHA1040H 「教育リーダーシップと政策」入門－政策、リーダーシップ、変容と多様性－ (Introduction to Educational Leadership and Policy: Policy, Leadership, Change and Diversity)**

本授業は教育政策、リーダーシップ、教育変容一般に関する入門編であり、特に教育及び教育行政の理解に重要な基礎的概念や理論に焦点を当てるものである。即ち、組織、コミュニティ、権力、権限、変容、差異、リーダーシップ、価値観といった、教育行政や教育政策、リーダーシップや教育変容にとって中心的な幅広い話題を批判的に考察する。こうした考察は、そうした領域における主要な歴史的発展だけでなく、実証主義 (positivism) や機能主義 (functionalism)、解釈主義 (interpretivism)、批判的教育学 (critical pedagogy)、フェミニズム、ポスト構造主義 (post-structuralism) やポストモダニズム (post-modernism) のような異なる理論的スタンスあるいはパラダイムを考慮に入れるものとする。本授業は生産的な方法で教育的実践に意味を付与する理論の活用方法を受講者が理解することに役立つものである。注意：すべての修士プログラムの学生は LHA1040H (この授業) か LHA1041H (次に挙げる授業) のいずれかをプログラムにおける最初の受講科目の1つとすることが強く望まれる。

担当者：C. キャンベル (C. Campbell)、S. デイビス (S. Davies)、スタッフ

### **LHA1041H 教育リーダーシップと政策 2－学校教育の社会的政策的文脈－ (Educational Leadership and Policy II: Social and Policy Contexts of Schooling)**

本授業は小・中等学校教員が活動を行う社会的政策的文脈に焦点を当てる。受講者は、次のような多様で複雑な環境における学校教育に関連した多様な事項を検討対象とする。即ち、教育に関する異なる目的や哲学、価値観；多文化主義と社会正義；人種、階級、ジェンダー、言語に関連するエクィティに関わる問題；学校教育における保護者の影響；学校教育と労働市場や経済との関係；学校及び教育プログラムの選択；脱集権化と集権化；スタンダードとアカウンタビリティ；教育財政；学校改革；教育及び非教育的圧力グループと利害関係者、等である。これらの問題あるいは関連する問題の探究を通して、本授業は受講者が教育行政、リーダーシップ、政策、教育変容における調査において用いられる異なるパラダイムや方法に対する理解を発達させ続けるのに役立つものである。

注意：すべての修士プログラムの学生は LHA1040H (前掲授業) か LHA1041H (この授業) のいずれかをプログラムにおける最初の受講科目の1つとすることが強く望まれる。どのような順番でこれら2つの授業を履修するかは、受講者次第である。受講者は別々に受講することも、同時に受講することもできる。

担当者：J. フレッサ (J. Flessa)、A. ロペス (A. Lopez)、R. ジョシー (R. Joshee)、スタッフ

### **LHA1042H 教育リーダーシップと多様性 (Educational Leadership and Diversity)**

本授業は受講者が経営や組織、文化的に多様な児童生徒を有する教育組織におけるリーダーシップに関連する実践や課題についての知見を得られるようデザインされている。受講者はそうした学校の経営やリーダーシップに関連する実践や課題を批判的に分析し評価する機会を持つことになり、また特にそうした学校組織における多民族的で反人種差別的な教育やリーダーシップに関する自分自身の概念やそれらに対する態度を、自分の学校経営実践に役立つ方法で、探究し明らかにする機会を持つことになる。

担当者：J. ライアン (J. Ryan)

### **LHA1047H 教室での実践における変容管理 (Managing Changes in Classroom Practice)**

本授業は、学習の今日的観点や教員発達の性質、教育の文脈といった問題を提示しつつ、教員の視点から教室での変容の意味を探究するものである。視点は、学校におけるリーダーシップの役割においてこれらの問題が、どのようにして自分の実践を改善するための教員の努力を促進し、どのようにして変容に対する学校外からのプレッシャーに意味のある形で対応することができるのかをよりよく評価するために用いられる。

担当者：S. アンダーソン (S. Anderson)

### **LHA1048H 教育リーダーシップと学校改善 (Educational Leadership and School Improvement)**

<p>リーダーシップの今日の概念を、現在の学校を改善し将来の学校を公衆に対してよりよく務めるようにすることにおけるそれら概念が内包する価値観について探究する。専門家リーダーシップ（expert leadership）に対する理解を、専門家リーダーの行為だけでなく彼らの感覚や価値観、課題解決戦略に関する研究をも通して、発展させる。リーダーシップの専門性開発に貢献する公式・非公式の経験が検討される。</p> <p>担当者：スタッフ</p>
<p><b>LHA1050H 変容・リーダーシップ・政策・社会的多様性におけるテーマと課題（Themes and Issues in Change, Leadership, Policy, and Social Diversity）</b></p> <p>本授業は、教育行政学領域の 10 コース M.Ed.プログラムにおける最後の授業としてデザインされている。そのため本授業では、教育行政学領域の知識を要約し統合し整理するのに役立つようデザインされた一連の演習を通して、教育行政学の包括的観点を開発するための機会を受講者に提供するものである。受講者は実践における特定の課題を、変容・リーダーシップ・政策・社会的多様性といった ELP の主要な要素のレンズを通して教育行政学の理論的基礎にリンクさせることになり、より広い領域に位置づけられた分析や統合、応用、より深い理解の構築などに焦点を当てる。最終的には、教育行政学領域における受講生の理解度の幅と深さを反映させた総合的ポートフォリオの創作を行う。</p> <p>担当者：J. ポーテリ（J. Portelli）</p>
<p><b>LHA1052H 教育リーダーシップと政策における個人講読調査—修士レベル—（Individual Reading and Research in Educational Leadership and Policy: Master's Level）</b></p> <p>教員の指示の下行われる、受講可能な授業に含まれない受講者にとっての特有の課題に焦点を当てた特別学習である。学位論文のための単位にはならないが、当該学習は学位論文の課題に密接に関連させることができる。</p> <p>担当者：スタッフ</p>
<p><b>LHA1060H 学校リーダーシップ演習 1（School Leadership Seminar 1）</b></p> <p>本授業は、オンタリオ州の学校で校長になるために受講する 2 つのコースのうちの 1 つ目のコースである。この授業の鍵概念は批判的評価であり、リーダーシップ実践やその効果、教授のリーダーシップ、教育変容や教育改革の努力に関連する領域における現在の調査に焦点を当てる。本授業の内容は、教育リーダーシップ実践に関連する現在の問題に対する批判的意識付けと、最先端の調査と専門家による実践によって形成された教育における現在の課題への応用を含むものである。本授業の成果としては、教育的環境における実践家の判断を磨くことである。授業課題を通して、受講者は新し知識と概念の応用におけるオリジナリティを示さなければならない。</p> <p>注意：OISE で提供される管理職資格プログラム（Principal's Qualification Program: PQP）[1]パート 1 の受講者限定</p> <p>担当者：C. キャンベル（C. Campbell）</p>
<p><b>LHA1061H 学校リーダーシップ演習 2（School Leadership Seminar 2）</b></p> <p>本授業は、我々の公教育制度の中で最も影響力のある役職の 1 つである校長の役割を探究する 2 つのコースの 2 つ目であり、オンタリオ州の学校で校長や教頭になることを目指している受講者にとっての基礎を提供するものであって、校長の役割における模範の実践につながる個人的専門的知識やスキル・実践の開発に焦点を当てた継続的専門的学習の 1 要素である。このプログラムは、受講者が自らの専門家としての継続的成長において教育調査を使いこなし、様々な事情の急速な変容によって特徴づけられるオンタリオ州のダイナミックで多様な文脈において、効果的に人々をリードすることのできる反省的教育リーダーとなるよう支援するようデザインされている。</p> <p>注意：OISE で提供される PQP パート 2 受講者限定</p> <p>担当者：ELP プログラム・コーディネーター</p>

**LHA1065H 国際比較における教育のエクィティと卓越性 (Educational Equity and Excellence in International Comparison)**

入学と達成の拡張と世界的収入格差の拡大の時代において、国家教育制度のエクィティと卓越性は機械の均等、経済成長と競争力にとっての鍵と見られている。本授業は教育的エクィティと卓越性はどのようにして定義され測定されるのか、どのように社会・教育政策と関連しているのか、それらは相反する目標なのかそれとも補完的な目標なのか、という問題について探究する。その際、社会学、経済学、心理学、教育学といった多様な理論的・学術的視点について、そして地位達成や流動性、人的資源、カリキュラムの体系性、学習機会に対するそれら学術的視点の見解について議論する。この枠組みを用いて、教育的エクィティと卓越性のマクロレベルのパターンに関する近年の経験的エビデンスを国際的かつ歴史的に考察し、これらのパターンを共有する教育組織や社会福祉政策の役割について検討する。最終的には、歴史、及び教育政策形成における国際的データの活用と濫用について、大規模国際評価やどのようにして特定の国が教育的エクィティと卓越性の世界モデルとしての卓越性を得るのかについて特に重視して、探究するものとする。本授業の目的は、受講者が教育的政策形成における国際的エビデンスに熟知し、批判的に消費するユーザーとなるようにすることである。受講に際して、統計的知識は求められない。

担当者：A. K. クミエレウスキ (A. K. Chmielewski)

**LHA1066H ジェンダー及び教育政策と実践に関する比較国際的視点 (Comparative and International Perspectives on Gender and Education Policy and Practice)**

ジェンダー問題とその教育における実践は世界規模の関連性を有し、南北の社会だけでなく世界銀行、OECD、そして様々な国連機関、ニック間提供者、国家を超えた市民社会組織といった主要な国際組織においても継続的な学術的政策的関心を受けてきた。本授業は、異なる理論的（フェミニスト、ウーマニスト、開発における女性、女性と開発、ジェンダーと開発、社会変容、教育）かつ推理的な枠組み（人的資源、人権、人的能力）、政策と実践（すべての人への教育、国連女子教育イニシアチブ、アフーマティブアクション、男女別学教育イニシアチブ、フェミニスト教育学）を批判的かつ比較的に探究する機会を受講者に提供するものとする。というのもこれらは、20世紀においてジェンダーと教育の広範で学際的な領域を形成してきたからである。社会的に構築され、実践され、挑戦されてきたアイデンティティとしての「ジェンダー」を強調しつつ、本授業では、女子と男子、女性と男性だけでなく、子どものころからの二元的ではないアイデンティティを持つ人々にとっての教育的機会や経験、成果について、批判的かつ比較的に探究する。教育的アクセスや生存、成果との関連におけるジェンダーや人種、階級、年齢、性的思考等の相互作用についても、特に注目する。

担当者：スタッフ

**LHA3003H 教育リーダーシップと政策におけるリサーチ・プロポーザルをデザインする (Designing Research Proposals in Educational Leadership and Policy)**

本授業は、効果的なリサーチ・プロポーザルの作成において博士課程の学生を支援するようデザインされている。文献講読、宿題、活動によって受講者は課題の明確化に対する構造化されたアプローチ、関連文献の丹念なレビュー、概念枠組みの主張、考察される課題に対する適切な放浪論的アプローチの認識、リサーチデザインにおけるインフォームドコンセントの目的についての理解、データ収集・分析と最終レポート執筆に必要なタイムラインの予想、などについて学ぶ。受講者は卒業研究資金調達のためのショート・プロポーザルや学位論文のためのプロポーザルの執筆の練習をすることになる。

注意：本授業は ELP の博士課程の学生向けの開講である（その他の希望者は担当者の許可が必要）。本授業の特別トピックバージョンを受講済みの学生は、この授業を受講することはできない。

担当者：J. フレッサ (J. Flessa)

**LHA3004H ED.D.プログラムのためのリサーチ・リテラシー (Research Literacy for the EdD Program)**

<p>本授業は、博士課程の学修及び専門とする職業における調査について、発見し、理解し、共有し、行動する方法を学ぶよう受講者を支援するものであり、またリサーチ・リテラシーの性質や、調査に基づいて発見し、理解し、共有し、行動するという概念と実践、教育調査の哲学やパラダイム、立場、方法の開発、調査を批評し引用する戦略、先行研究、調査レビューの統合、メタ分析、コミュニケーションのデザインと利用、について検討する。</p> <p>担当者：スタッフ</p>
<p><b>LHA3005H EdD.のための調査方法入門〔調査方法論〕 (Introduction to Research Methods for the EdD [RM])</b></p> <p>本授業の目的は、ELP プログラムの Ed.D.学生に対し、教育変容に関するケーススタディや比較ケーススタディ、教育調査のための質的・エスノグラフィの方法、政策文書の体系的分析、サーベイ、学校・制度・その他の組織運営データの量的分析、等の応用的調査のための多様なリサーチデザインやデータ収集方法を知り実践する機会を提供することである。</p> <p>受講条件：LHA3004H を受講していること。</p> <p>担当者：スタッフ</p>
<p><b>LHA3006H Ed.D.学生のためのデータ分析〔調査方法論〕 (Data Analysis for the Education Doctorate [RM])</b></p> <p>本授業は、ELP の Ed.D.プログラムにおけるコアコースの 1 つであり、受講者に実践に関わる問題を研究するのに最も適切なデータ分析アプローチを学び実践する機会を提供することである。この授業において受講者は、質的及びケーススタディ・データや政策文書のコーディングと体系化、サーベイ調査や学校運営上のデータの量的検討などを行うことになる。本授業においてはまた、受講者は幅広い知識移動戦略やそれらをそれぞれのプロジェクトにつなげる戦略について探究することが求められる。</p> <p>受講要件：LHA3005H を受講していること。</p> <p>担当者：スタッフ</p>
<p><b>LHA3007H Ed.D.プログラムのための先行研究のレビュー (Literature Reviews for EdD Program)</b></p> <p>本授業は、受講者に学術文献を統合する際に必要とされるスキルと知識を提供する。特に、教育学や社会科学において先行研究をレビューする際の哲学や想定、特徴、方法について詳しくなるための機会を受講者に提供する。受講者は先行研究はどのようにレビューされるべきかに関する理論に触れ、自分自身のレビュー・スキルを開発するための機会を得ることになる。</p> <p>受講要件：LHA3004H を受講していること。</p>
<p><b>LHA3022H 学校文化の調査—学校の日常の検討— (The Investigation of School Culture: An Examination of the Daily Life of Schools)</b></p> <p>本授業は管理職の文脈に学校生活の規範、価値観、実践を位置づけることを問いとしている。その焦点はコミュニティの開発と教育目的の達成を促進したり抑制したりする要因に置かれる。受講者は多様な解釈枠組みを探究し、これを組織文化に関する自分の理解に応用することが求められる。</p> <p>担当者：J. ライアン (J. Ryan)</p>
<p><b>LHA3025H 教育リーダーシップの個人的・専門職的価値 (Personal and Professional Values of Educational Leadership)</b></p> <p>博士課程レベルの本授業は、教育リーダーシップの実践における個人的・専門職的双方の価値観に影響する理論や枠組みを検討するものである。第一義的な焦点は、個人によって表明される価値観と管理的問題解決プロセスにおけるそれらのインパクトに置かれる。その際、ここの価値観がより広い社会的な、かつ組織に関連する集団的あるいはメタ的な価値観と衝突するときに特に生じる価値観の衝突を検討する。</p> <p>担当教員：スタッフ</p>

**LHA3030H 教育における法的問題（上級編） Advanced Legal Issues in Education**

教育法の理解は学校の効果的運営にとって不可欠である。学校は複雑な法的環境において機能する。教育者が自分の法的権利と責任に関しできるだけ現在の（カレント）であることは必須である。本授業の焦点は、現在の問題と、制定法及びコモン・ローの手続きに置かれる。

担当者：M. ズッカー（M. Zucker）

**LHA3037H 教育組織における戦略的プランニング（Strategic Planning in Educational Organizations）**

本演習においては、戦略的プランニングの概念が教育制度におけるプロセスや課題、応用の簡単から探究される。戦略的プランニングの役割は組織のミッション、利害関係者、環境の観点において検討される。

担当者：スタッフ

**LHA3040H 行政理論と教育問題Ⅰ－組織における人と権力－（Administrative Theory and Educational Problems I: People and Power in Organizations）**

個人と組織に関する主要な視点のレビューは、社会の性質と人間の性質に関係する問題を議論することを含む。当面の関心は決定や組織の成果が生み出される方法と、こうした調整が組織化された教育によって影響される個々人の生産性や生活の幸福度にある関係性である。公選の公務員や任命の管理職、教員、児童生徒、一般大衆に関連する日常状況において権力が行使される方法が主な関心事である。

担当者：J. フレッサ（J. Flessa）

**LHA3041H 行政理論と教育問題Ⅱ－教育における政策問題に関する博士課程演習（Administrative Theory and Educational Problems II: Doctoral Seminar on Policy Issues in Education）**

本演習は、歴史と現在、カナダと海外、双方の教育における重要な政策問題を検討する。その際、第一次的には政策の内容や意義の理解を得ることが、第二次的には政策分析と開発への関心を得ることが、強調される。ELP プログラムの多様な教員が特定のセッションに関して責任をもって演習を行う。

注意：Ed.D.学生は必修である。Ph.D.学生は選択科目として受講できる。教育行政学コース以外の学生の受講に関しては、コース・コーディネーターの許可が必用である。

担当者：R. ジョシー（R. Joshee），スタッフ

**LHA3042H 教育リーダーシップと政策におけるフィールド・リサーチ〔調査方法論〕（Field Research in Educational Leadership and Policy [RM]）**

本授業は、教育行政学におけるフィールド・リサーチとケース・スタディに応用された自然主義的でエスノグラフィックな調査方法について探究するものである。社会的現実の参加者であると同時に観察者でもある研究者、社会調査における事実と価値観の関係、真実生成における科学の限界、そうした科学が創り出した真実の評価と経営行動とのつながり、組織的経営的現実への倫理的探究の問題などを検討する。

担当者：J. ライアン（J. Ryan）

**LHA3043H 教育リーダーシップと政策におけるサーベイ調査〔調査方法論〕（Survey Research in Educational Leadership and Policy [RM]）**

教育リーダーシップと探究におけるサーベイ調査の歴史と現在の使用について探究し、サーベイの長所と限界に関する評価やサンプルの選定、質問紙のデザイン、フィールドで用いられる標準的測定道具、データ分析の方法（SPSSを使用）、因果的含意の導出、明確かつ効果的な方法による結果の提示などについて検討する。

担当者：R. チャイルズ（R. Childs），スタッフ

**LHA3044H 教育リーダーシップと政策におけるインターンシップ／実習（Internship/Practicum in Educational Leadership and Policy）**

<p>大学院教員及びインターンシップ／実習の現場の上級管理職によるガイダンスの下、第一次的に Ed.D.学生が行う経営的経験上級編である。インターンシップ／実習に関連する配置と責任は、学生のニーズや関心、希望及び適切な実習場所の利用可能性によって個人ベースで決定される。</p> <p>担当者：スタッフ</p>
<p><b>LHA3047H リーダーシップと教育変容に関する調査演習（Research Seminar on Leadership and Educational Change）</b></p> <p>本授業は、学校を改善・改革・再構築するために採用される多様なイニシアチブについて探究する。これらイニシアチブの基本的な意図は、教室、学校、学校制度レベルでの政策的な変容プロセスの含意を理解するための努力において考察される。その際、教育変容を促進するリーダーシップの役割が強調される。受講者は授業のコンセプトの実践的意味を例証し、調査能力を洗練するようにデザインされた調査プロジェクトに参加することになる。</p> <p>担当者：C. キャンベル（C. Campbell）</p>
<p><b>JOI3048H 教育調査における中間統計－重回帰分析－〔調査方法論〕（Intermediate Statistics in Educational Research: Multiple Regression Analysis [RM]）</b></p> <p>本授業においては、サンプリングや統計的推定といった初歩的概念における授業をすでに修得している学生向けにデザインされた中間的な応用統計学について学ぶ。本授業が扱うのは、二変数及び多変数の直線回帰モデル、曲線回帰機能、ダミーと名目変数、相互作用、モデル選定、想定、診断の使用・解釈・提示である。具体例は共通して使われる大規模教育データベースから抽出される。受講生は Stata を用いることを奨励される。本授業はまた、つまり、本授業はこのソフトウェア・パッケージ（SPSS あるいはその他使い慣れたソフトウェアでもよい）の入門編でもある。本授業の目的は、自分の調査において回帰モデルを使い、解釈し、執筆する能力を身に付けることである。</p> <p>受講要件：JOI1287H[2]あるいはそれと同等の統計入門授業を習得していること。あるいは担当者の許可があること。</p> <p>担当者：A. K. クミエレウスキ（A. K. Chmielewski）</p>
<p><b>LHA3052H 教育リーダーシップと政策における個人講読調査－博士課程レベル－（Individual Reading and Research in Educational Leadership and Policy: Doctoral Level）</b></p> <p>授業概要は、1052H と同様。</p> <p>担当者：スタッフ</p>
<p><b>LHA3055H 民主的価値、児童生徒参加、民主的リーダーシップ（Democratic Values, Student Engagement, and Democratic Leadership）</b></p> <p>児童生徒参加とリーダーシップの問題への民主的価値の検討と応用について検討する。本授業では、児童生徒参加と批判的民主的リーダーシップの関係や、この関係性の性質から教育行政やカリキュラムに対して生じる含意について考察するものであり、教員及び管理職双方にとって有益である。</p> <p>担当者：J. ポーテリ（J. Portelli）</p>
<p><b>LHA5000H 教育リーダーシップと政策における特別課題研究－修士課程レベル－（Special Topics in Educational Leadership and Policy: Master's Level）</b></p> <p>本授業においては、当該年度の授業リストでカバーされていない教育行政学における特定のトピックや領域における研究を行うことができる。トピックは冬学期及びサマーセッションの時間割において毎年4月に通知される。</p> <p>担当者：スタッフ</p>
<p><b>LHA6000H 教育リーダーシップと政策における特別課題研究－博士課程レベル－（Special Topics in Educational Leadership and Policy: Doctoral Level）</b></p>

本授業においては、当該年度の授業リストでカバーされていない教育行政学における特定のトピックや領域における研究を行うことができる。トピックは冬学期及びサマーセッションの時間割において毎年4月に通知される。

担当者：J. フレッサ (J. Flessa) , J. ガスケル (J. Gaskell) , スタッフ

#### **EDP3045H 教育政策とプログラム評価 (Educational Policy and Program Evaluation)**

本授業は、適切な調査方法に関する授業との関連において、教育における政策分析とプログラム評価に関心のある博士課程の学生に対し、関連する概念的、方法論的、倫理的、政治的問題について理解するための機会を提供する。授業のトピックは課題形成 (problem framing) , 既存の調査エビデンスの活用、政策の擁護、保護者や依頼人との関係などである。OISE の協働的専門分野 (collaborative specialization) からのゲストスピーカーを迎えることで、受講者は多様な対照的調査慣習とスタイルを知ることができる。本授業の課題は応用調査プロジェクトの何らかの側面を実施することになる。

注意：LHA3045H あるいは TPS3045H をすでに修得している学生は、受講できない。

担当者：N. バッシア (N. Bascia)

#### **EDP3145H 教育政策分析とプログラム評価における上級課題 (Advanced Issues in Educational Policy Analysis and Program Evaluation)**

本授業は、適切な調査方法に関する授業との関連において、教育における政策分析とプログラム評価に関心のある博士課程の学生に対し、関連する概念的、方法論的、倫理的、政治的問題について理解するための機会を提供する。授業のトピックは課題形成 (problem framing) , 既存の調査エビデンスの活用、政策の擁護、保護者や依頼人との関係などである。OISE の協働的専門分野 (collaborative specialization) からのゲストスピーカーを迎えることで、受講者は多様な対照的調査慣習とスタイルを知ることができる。本授業の課題は応用調査プロジェクトの何らかの側面を実施することになる。

注意：LHA3145H あるいは TPS3145H をすでに修得している学生は、受講できない。

担当者：N. バッシア (N. Bascia)

#### **ELP プログラムにおいて単位取得可能なその他の授業**

##### **LHA2006H 教育財政と経済学 Educational Finance and Economics**

本授業は学校やカレッジ、大学を支援する、公的及び市的な資源に関するものである。即ち、資源はどうやって調達され配分されるのか、どうやって予算化されるのか、経済的にどのように正当化されるのか、そしてどう説明されるのか、についてである。本授業はまた、関係性についてのものでもある。即ち、教育における投資とより大規模な経済との関係性、制度の体系と資金が配分され説明される方法の関係性、予算の形態と資金が配分される効率性との関係性、資金と教育的室の関係性、である。スミスやリカルド、マルクス、ベッカー、ロストーといった人的資本に関する古典派経済学者の考えは議論されるが、本授業は経済理論のバックグラウンドは要件とはしない。

注意：TPS1017H あるいは TPS1841H を受講したことのある学生は、単位のためにこの授業を履修することはできない。

担当者：D.W. ラング (D. W. Lang) , スタッフ

授業番号冒頭のアルファベット3文字は「Leadership, Higher and Adult」という研究科名を指し、最後の「H」は「Half Course (ハーフコース)」を指す。またこの一覧にはないが、研究科によっては授業番号の最後に「Y」とされている場合がある。これは「Year」のことを示しており、「フルコース」であることを意味している。また最後の「LHA2006H」の注意書きにある「TPS」とは、2012年にOISEが改組される前にあったLHAEの前身である「Theory and Policy Studies」を指す。

出典：(OISE, 2019, pp. 94–99) の記述をもとに、筆者作成。

表 2 研究領域ごとの推奨授業科目

<p><b>Policy</b></p> <p>LHA1018H Political Skill in the Education Arena</p> <p>LHA1024H Critical Conversations: Philosophy, Educational Leadership and Educational Policy Studies</p> <p>LHA1030H The Legal Context of Education</p> <p>LHA1035H Sociology of Education</p> <p>LHA1045H Language Policy Across the Curriculum</p> <p>LHA1065H Educational Equity and Excellence in International Comparison</p> <p>LHA2006H Educational Finance and the Economics</p> <p>LHA3030H Advanced Legal Issues in Education</p> <p>LHA3045H Educational Policy and Program Evaluation</p> <p>JOI3048H Intermediate Statistics in Educational Research: Multiple Regression Analysis [RM]</p>
<p><b>Leadership</b></p> <p>LHA1012H Organizational Culture and Decision-Making</p> <p>LHA1016H School Program Development and Implementation</p> <p>LHA1026H Evaluation of Professional Personnel in Education</p> <p>LHA1042H Educational Leadership and Diversity</p> <p>LHA1047H Managing Changes in Classroom Practice</p> <p>LHA1048H Educational Leadership and School Improvement</p> <p>LHA3025H Personal and Professional Values of Educational Leadership</p> <p>LHA3047H Research Seminar on Leadership and Educational Change</p>
<p><b>Change</b></p> <p>LHA1020H Teachers and Educational Change</p> <p>LHA1025H School Effectiveness and School Improvement</p> <p>LHA1035H Sociology of Education</p> <p>LHA1047H Managing Changes in Classroom Practice</p> <p>LHA1048H Educational Leadership and School Improvement</p>
<p><b>Social Diversity</b></p> <p>LHA1019H Diversity and the Ethics of Educational Administration</p> <p>LHA1042H Educational Leadership and Diversity</p> <p>LHA1065H Educational Equity and Excellence in International Comparison</p> <p>LHA3055H Democratic Values, Student Engagement and Democratic Leadership</p>

出典：(OISE, 2019, pp.83-84) をもとに、筆者作成。

### 3. 学位プログラムの概要

本プロジェクトの研究対象はあくまでも専門家向け学位プログラムである M.Ed.及び Ed.D.プログラムであるが、比較対象を提示するために、本節ではこれらに加えて M.A.及び Ph.D.といった研究者向け学位プログラムについても検討することとする。

**(1) M.Ed.プログラム**

ELP の M.Ed.プログラムは、第一義的には特に社会的多様性と変容について、リーダーシップと政策の性質と実践を学ぶことに興味をもつ学生のためにデザインされており、主に K-12 における教育関連事項に焦点を当てている。学生はパートタイムかフルタイムのいずれかの出席形態で学位取得を目指すことができる。

入学要件としては、大学院学部 (School of Graduate Studies) が定める『総合規則 (General Regulations)』<sup>3</sup>において規定される大学院でのすべての学位プログラムに共通する入学の際の「最低限の要件 (Minimum Requirements)」に加えて、ELP に関連する学問領域における学士号及びそこでの最終学年での成績がトロント大学での「B の中 (mid-B)」以上と同等のものであることとされている。応募書類としては、教育リーダーシップと政策に関する研究と実践についての志望理由書、在籍したすべての中等後教育機関発行の成績証明書、履歴書、推薦状 2 通 (1 通は申請者が実務を行った機関の教育専門家執筆のものであり、もう 1 通は申請者の学術的能力を証明できる者が執筆したもの) となっている<sup>4</sup> (OISE, 2019)。

プログラムを修了するまでのオプション (program options, 単位の修得方法) としては、「オプション II : コースワーク+メジャー・リサーチ・ペーパー (Option II: Major Research Paper: MRP)」と「オプション IV : コースワーク・オンリー・オプション (Option IV: Coursework Only Option)」の二種類がある。オプション II においては、プログラム修了のため以下の要件を満たしつつ、4 フルコース (8 ハーフコース)<sup>5</sup>の授業を修得する必要がある。

## ① 次の 2 つの授業の修得

- LHA1003H 「リサーチ・プロポーザルをデザインする (修士)」パートタイム学生はこの授業をプログラムの終盤に、フルタイム学生は 1 年時に、それぞれ履修することが望ましい。
- LHA1040H 「教育リーダーシップと政策入門ー政策, リーダーシップ, 教育変容と多様性ー」

## ② その他の 3 フルコース (6 ハーフコース) 授業の修得。そのうち 1.5 フルコース (3 ハーフコース) は ELP の授業でなければならない。学生は上述の 4 つの研究領域 (政策, リーダーシップ, 変容, 社会的多様性) から焦点を 1 つ選ぶことができる。「LHA 1004H 教育リーダーシップと政策におけるリサーチ・リテラシー」を履修することが強く推奨される。

## ③ MRP の執筆

担当教員の指導の下、「LHA 2001Y メジャー・リサーチ・ペーパー (Major Research Paper)」<sup>6</sup>において実施される。

オプション IV (コースワーク・オンリー・オプション) においては、同様に 5 フルコース (10 ハーフコース) を修得する必要があるが、次のようなオプション II との違いがある。

<sup>3</sup> <https://sgs.calendar.utoronto.ca/general-regulations> (2019 年 6 月 27 日採取)。

<sup>4</sup> [https://www.oise.utoronto.ca/lhac/Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy/MEd\\_in\\_Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy.html](https://www.oise.utoronto.ca/lhac/Educational_Leadership_and_Policy/MEd_in_Educational_Leadership_and_Policy.html) (2019 年 7 月 7 日採取)。

<sup>5</sup> トロント大学では、1 ハーフコースの授業は 12 回の授業から構成され、時間は 1 回につき 3 時間となっており、それを 1 学期 (秋学期: 9-12 月, 冬学期: 1-4 月, サマーセッション前期: 5-6 月, サマーセッション後期: 7-8 月) で完結させることが多い。

<sup>6</sup> これはコースワークではないため、表 1 作成時に参照した文献には概要説明がなかったが、内容は MRP 執筆のための指導であり、MRP を履修する場合には冒頭のコードナンバーにより履修申請をすることになっており、それによって修了に向けて MRP 作成を行っていることの公的証明となっている。

- ① 次の2つの授業の修得
  - LHA1004H「教育リーダーシップと政策におけるリサーチ・リテラシー [調査方法論]」プログラムのはじめに履修。
  - LHA1040H 「教育リーダーシップと政策」入門ー政策，リーダーシップ，変容と多様性ープログラムのはじめに履修することが望ましい。
- ② その他の4フルコース（8 ハーフコース）授業の修得。そのうち2フルコース（4 ハーフコース）授業は ELP の授業でなければならない。学生は上述の4つの研究領域（政策，リーダーシップ，変容，社会的多様性）から焦点を1つ選ぶことができる。

また、オプションⅣには「正規ストリーム (Regular Stream)」と「オンライン／複式・コーホート・ストリーム (Online/Hybrid Cohort Stream)」の二種類の受講形態がある。正規ストリームは通常の対面式の受講方式であり、フルタイムでもパートタイムでも受講可能である。また、修了要件は上述のオプションⅣと同様である。オンライン／複式ストリームはパートタイム学生のみ受講可能であり、修了要件は正規ストリームと同様であるが、上述の必修科目を含む3フルコース（6 ハーフコース）はオンライン形式で受講し、残りの2フルコース（4 ハーフコース）はオンライン形式か対面式かを選択することができる<sup>7</sup>。

新入生はまず入学と同時にオプションⅣに振り分けられるが、研究科の許可を得てオプションⅡに移動することもできる。コースワーク・オプションから MRP オプションへの移動は通常、少なくとも授業を3コース取り終えた後で考慮されることが多い。移動の相談を受けた場合、研究科は通常はそうしたリクエストに対して支援的であるが、学生は実際に移動願いをする前に次のような要件を満たしておかなければならない。即ち、移動の手続きはまず MRP オプションへの移動の実施可能性についてアドバイザーと協議することによって始めること；アドバイザーの承認を得た場合、リサーチ・トピックを決めること；通常は ELP 教員の中から指導教員を選択すること；プログラム移動願いと MRP プロジェクト指導承認書に必要事項を記入の上提出し、研究科長の承認を得ること；提出書類には必要事項が過不足なく記入されていること、移動希望理由が明確に記述されていること、指導教員の署名があることなどを確認すること；等である。MRP オプションは、学生に自分で選んだトピックについて通常のコースワークにおけるよりも深く考察する機会を提供するものである。MRP オプションの学生は指導教員の指導の下自律的に学修を進める必要があり、MRP のトピックやフォーマットは学生の関心によって様々であるため、MRP を完成させるまでにかかる時間も学生によって大きく異なる。しかし、MRP 完成までの負担は大体コースワーク・オプションにおける1学期間2授業コースを修了するのと同じくらいとされており、故に通常はコースワーク・オプションよりも長期間を要する。場合によっては年度を跨ぐ場合もあり、その場合は授業料も追加的に支払う必要が出てくる<sup>8</sup>。

ELP の M.Ed.プログラムには、通常のプログラム以外に上述したオンライン・ストリームもあるが、それ以外にも特に受講者をハミルトン・ウェントワース教育区教育委員会 (Hamilton-Wentworth District School Board) 管轄下にある教員に限定したプログラムもある。これはコースワーク・オプション限定であり、修了までに求められるコース数は10ハーフコースと正規ストリームと同様であるが、10ハーフコースのうち6ハーフコースについては当該教育委員会内で、残りの4ハーフコースについては OISE

<sup>7</sup>[https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy/MEd\\_in\\_Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy.html](https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational_Leadership_and_Policy/MEd_in_Educational_Leadership_and_Policy.html) (2019年7月7日採取)。

<sup>8</sup>[https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy/MEd\\_in\\_Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy.html](https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational_Leadership_and_Policy/MEd_in_Educational_Leadership_and_Policy.html) (2019年7月8日採取)。

での対面式あるいはオンラインで受講することとされている<sup>9</sup>。

## (2) M.A.プログラム

M.A.プログラムの入学要件としては、『総合規則』にある「最低限の要件」に加えて ELP に関連する学問領域における学士号が要求されるのは M.Ed.と同様であるが、M.Ed.がそこでの最終学年での成績がトロント大学での「B 中」以上と同等のものであることとされているのに対し、M.A.では「B+以上」の成績が求められる。応募書類は M.Ed.と同様で、教育リーダーシップと政策に関する研究と実践についての志望理由書、在籍したすべての中等後教育機関発行の成績証明書、履歴書、推薦状 2 通（1 通は申請者が実務を行った機関の教育専門家執筆のものであり、もう 1 通は申請者の学術的能力を証明できる者が執筆したもの）となっている。就学形態はフルタイムでもパートタイムでも可能であるが、修了までの期間はフルタイム学生で最大 2 年間とされている<sup>10</sup>。

M.A.プログラムの修了にはコースワークの修得と学位論文の執筆が求められることになっており、M.Ed.のようにコースワークのみでの修了や学位論文の代わりに MRP を作成することなどはできない。コースワークについては、4 フルコース（8 ハーフコース）の修得が求められるが、そのうち「LHA1003H リサーチ・プロポーザルをデザインする（修士）」、「LHA1004H 教育リーダーシップと政策におけるリサーチ・リテラシー [調査方法論]」、「LHA1040H 教育リーダーシップと政策入門－政策、リーダーシップ、変容と多様性－」の 3 ハーフコース（1.5 フルコース）は必修となっている。これら以外に 2 フルコース（4 ハーフコース）分の授業は ELP 領域から履修することになっており、また「LHA1041H 教育リーダーシップと政策 2－学校教育の社会的政策的文脈－」は履修することが強く推奨されている。つまりこの時点で要件となっている 8 ハーフコース（4 フルコース）のうち 7 ハーフコース（3.5 フルコース）を満たしていることになる<sup>11</sup>。残りの 1 ハーフコース（0.5 フルコース）は LHAE で開講されている授業か、OISE あるいはトロント大学内のその他の大学院研究科における授業の履修により満たすことができる。また、これら以外の授業の修得を求められる場合もある（OISE, 2019）。

## (3) Ed.D.プログラム

ELP における Ed.D.プログラムは、学校制度やカレッジ、大学などその他の教育機関における高度に有能なリーダーシップを育成することを意図して設置されたものであり、教育制度におけるリーダーとしての実践を洗練させるのに役立つ知的な調査スキルを開発することを望む専門的教育実践家のために特にデザインされている。また、Ed.D.プログラムは教育実践家が直面している課題を理解し解決するのに直接的に有益なリーダーシップや政策、社会的多様性に関する理論と研究の諸要素に特化したものである。

Ed.D.プログラムには、フルタイム学生のみ入学可能である。その他の入学要件としては、『総合規則』にある博士課程入学のための要件に加えて、ELP の独自要件として次の事項を満たすことが求められる。

- ① ELP 領域における修士の学位あるいはそれと同等と認められる学位の取得及びその際の成績が優

<sup>9</sup> [https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy/MEd\\_2019\\_HWSDB\\_Cohort.html](https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational_Leadership_and_Policy/MEd_2019_HWSDB_Cohort.html)（2019 年 7 月 8 日採取）。

<sup>10</sup> [https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy/MA\\_in\\_Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy.html](https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational_Leadership_and_Policy/MA_in_Educational_Leadership_and_Policy.html)（2019 年 7 月 8 日採取）。

<sup>11</sup> [https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy/MA\\_in\\_Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy.html](https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational_Leadership_and_Policy/MA_in_Educational_Leadership_and_Policy.html)（2019 年 7 月 9 日採取）。

秀なものであること。学生に管理運営研究に関する経験がない場合、追加的なコースワークが課される場合がある。

- ② 志望理由書
- ③ 志望理由書以外に、自ら執筆した補完的文書。これは、入学審査委員会 (admissions committee) が、申請者が Ed.D.の厳格なコースワークや体系的調査遂行に耐えうるかどうかの評価をする際に用いられる。修士課程に在籍し MRP や学位論文を執筆した申請者は、それらの提出が求められ、そうでないものは明確かつ分析的に教育問題について執筆できる能力があることを示す文書を提出しなければならない。例えば、修士課程において執筆したレポートや政策文書、出版物等である。
- ④ 申請者は教育機関のリーダーシップの地位における成功経験を有しているか、あるいはリーダーシップの地位に着く潜在能力を示さなければならない。そのための証拠資料として、申請者が勤務していた機関の上級管理職からの、教育課題を認識し解決するに際して申請者が果たしたことや他者と協働する能力、リーダーシップ・スタイル、現在の社会的教育的問題への意識などについて記述している推薦状を少なくとも 1 通提出することが求められる。
- ⑤ 申請者が在籍していた教育研究機関の教授からの、申請者の学術的達成に関して記述している推薦状を 1 通提出しなければならない。
- ⑥ 履歴書
- ⑦ 在籍した中等後教育機関発行の成績証明書<sup>12</sup> (OISE, 2019)

Ed.D.プログラム修了のための要件は、コースワーク、理解度テスト (comprehensive examination)、学位論文研究計画書口頭試問 (Thesis Proposal Hearing)、学位論文、となっている。第一のコースワークについては、4 フルコース (8 ハーフコース) 授業の修得が求められる。その際、次にあげる授業は必修である。即ち、LHA3040H「組織における人と権力」、LHA3004「リサーチ・リテラシー」、LHA3005H「調査方法入門」、LHA3006H「調査方法Ⅱ」、LHA3041H「教育における政策問題に関する博士課程演習」、LHA3007H「先行研究のレビュー・コース (Literature Review Course)」、LHA3003H「リサーチ・プロポーザル開発コース」である。上記で 7 ハーフコース (3.5 フルコース) を満たしたことになるが、残りの 1 ハーフコース (0.5 フルコース) は表 1 中のコース番号「3000 レベル」(博士課程科目) あるいは「6000 レベル」(スペシャルトピック) から選択することになっている。授業の多くは学生が就業しながら就学できるよう、夜間開講となっている。

その他の修了要件のうち、理解度テストとは、反省的实践 (reflective practice) を強調したポートフォリオに関する口頭試問であり、研究計画書口頭試問とは学位論文執筆のための調査を実施する前に作成する研究計画書の内容に関する口頭試問である<sup>13</sup> (OISE, 2019)。これらをパスしたうえで、学位論文を執筆し、最終口頭試問での審査を通ればプログラム修了、博士の学位授与ということになる。参考までに、LHEA の前身 (2012 年の組織改編前) である TPS (Department of Theory and Policy Studies in Education) での筆者の Ph.D.プログラムでの経験を述べると、次のようになる。

筆者は OISE の TPS に入学後、秋冬の 2 学期及びサマーセッション半期を使って必要なコースワークすべてを修得した。その後約 1 年をかけて研究計画書を作成し、指導教員 (thesis supervisor) の承認を

<sup>12</sup> [https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy/EdD\\_2019\\_Cohort.html](https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational_Leadership_and_Policy/EdD_2019_Cohort.html) (2019 年 7 月 9 日採取)。

<sup>13</sup> [https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy/EdD\\_2019\\_Cohort.html](https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational_Leadership_and_Policy/EdD_2019_Cohort.html) (2019 年 7 月 9 日採取)。

受けて研究計画書の口頭試問を行った。研究計画書の作成に際しては、指導教員を含めた「学位論文助言委員会 (Thesis Advisory Committee)」<sup>14</sup>が組織された。委員には TPS の教員 2 名と、筆者の博士論文のテーマであった「学校運営への生徒参加」に詳しいと思われる CTL の教員 1 名の計 3 名に依頼した。そして研究計画書執筆の段階から助言委員会委員からの助言を受け、委員との協働作業を通して研究計画書を完成させた。研究計画書の分量の目安は大体 15-20 頁 (12 ポイント, ダブルスペース) とされていたが、筆者のそれは約 45 頁になった (上限は指定されていなかったため)。そして口頭試問の日時と場所 (TPS 内の教室) が決定・掲示された。当日は本人と助言委員会委員に加えて、助言委員会外からの外部審査委員 (external examiner, TPS の教員) が出席し、またその他の教員や学生も参加可能であった (筆者の時は 4-5 名の学生が参加していた)。口頭試問ではまず、筆者が約 30 分間の研究計画書概要説明を行い、発表内容に基づいて約 1 時間の質疑応答があった。質問は、指導教員及び助言委員会委員、外部審査委員以外の参加者もできる。研究計画書口頭試問が終わると、その直後に同じ場所で筆者、指導教員、助言委員 3 名、外部審査委員の計 6 名のみとなって、理解度テストが行われた。これは、研究計画書に記載されている先行研究のレビューやリサーチ・クエスチョンなどがより広い教育行政学全体の知見の中でどのように位置づけられるのかや、この研究は教育行政学分野にどのようなインパクトがあるのかといった視点からその理解度について問われるテストである。事前に「理解度テストレポート (comprehensive examination paper, 上述の『ポートフォリオ』にあたる)」を執筆・提出することが求められるが、これは研究計画書作成と同時に執筆・提出した。理解度テストにおいては、理解度テストレポートの内容と研究計画書及び口頭試問の内容について参加者から質問を受け、それに筆者がどう答えるかということが問われた。テストは約 30 分で終了した。筆者は特に問題なく研究計画書口頭試問及び理解度テスト双方をパスしたが、そうでないこともあり得る (筆者の周りにはいなかったが)。その後、学位論文執筆のための調査実施の許可を得るため、「倫理審査プロトコル (Ethical Review Protocol)」及び関連文書 (インフォームドコンセント・フォームなど) を作成のうえ、研究計画書と併せて「トロント大学研究倫理審査委員会 (Research Ethics Board)」に提出し、許可を得た。そして調査を実施したうえで博士論文を執筆し、研究計画書口頭試問から約 2 年半後に指導教員や助言委員会委員の承認を受けたうえで、最終口頭試問 (Final Oral Hearing) が行われた。当日は指導教員・助言委員会委員に加え、トロント大学以外の大学からの外部審査委員 1 名が招聘され、またトロント大学内 OISE 外から司会として教員 1 名 (確か筆者のときは経済学研究科の教員であったと記憶している)、筆者を含めて計 6 名が参加した。最終口頭試問は学生間では「最終防衛 (Final Defense, 我々は単に『ディフェンス』と呼んでいた)」とも呼ばれる。つまり、研究計画書口頭試問など最終口頭試問以前の機会に提示される質問や疑問に関しては、あくまでそれらは「筆者の学位論文を改善するための助言」という観点からなされるものであるため、必要であれば批判を受け入れ改善のために役立てる等の柔軟な対応をとることが求められるが、ディフェンスに際して提出している学位論文最終稿のドラフトは、いわば執筆者にとっては「最後の砦」であって、この機会に寄せられるすべての質問に対しては適切に回答し、学位論文で主張していることを「防衛」する必要がある、ということである。ディフェンスはまず筆者による約 30 分間の概

<sup>14</sup> 「審査委員会」ではなく「助言委員会」であるところがカナダらしい点である。つまり、委員の役割は、学生が作成した論文や研究計画書を単に「審査」するだけではなく、研究計画書の執筆段階から助言を行い、より良い研究計画書及び学位論文の完成を目指して学生と共に協働作業を行うことが、指導教員を含む助言委員会委員の責任とされている。日本の審査委員会も同様の機能を果たしているだろうが、その比重の大きさの違いは名称の違いに現れていると見ていいだろう。少なくとも「これは君の論文だから」と言って、内容の批判はするがそれを具体的にどのように改善すればいいかのアドバイスはほとんどないといった対応は、OISE では管見の限り聞いたことがない。

要説明で始まり、それから各参加者から質問があり、それに筆者が答えるという形式で進められた。関係者以外の参加はできない。時間としては全部で約3時間かかり、無事に「ディフェンス」することができた。これで学位課程修了（手続き的にはいくつかの書類作成や「学位授与式（Convocation）」に出席し、正式な「学位記」を授与されて博士号取得ということになるが）ということになる。筆者の例は Ph.D. であるが、Ed.D.の学位取得までの道のりにおいても、ほぼ同内容のプロセスを経ることになっていた。

ところで、ELP の Ed.D.プログラムには、次の3つの特徴があるとされる。第一に、「コーホート形式（cohort format）」である。即ち、学生はプログラムを通して、ネットワーク化とコミュニケーションのためのスキル開発や協働的実践コミュニティや学生－教員間の質の高い関係性の構築を奨励するために、1つのコーホート（群）として活動を行う。第二に、「連続性（sequence）」である。即ち、習得すべき8ハーフコースは次のように、内容的にも時期的にも体系的に提供される。まず初めの2年間については、7－8月のサマーセッション後期の6週間を使って2コースを、続く秋学期・冬学期にそれぞれ1コースずつをそれぞれ修得し、これを2年間行うことで8ハーフコースを修了したことになる。そして3年目のはじめに理解度テストと研究計画書口頭試問を行い、残りの期間を学位論文執筆に充てる、論文完成後、ディフェンスを迎えるというスケジュールである。修了までには、大体3－4年かかるとされている。表3は、2019年7－8月のサマーセッションからプログラムを開始した場合の履修例である。第三の特徴としては、「実践（practice）」である。つまり、Ed.D.プログラムはすべて教育行政学分野における実践に基づいており、反省的実践に焦点を当てている。そこでの知識と理論は、学校管理職や教育行政職員が直面する課題を提示する場合に応用されるということになっている<sup>15</sup>。

表3 Ed.D.における授業コース履修例

学期	授業科目
2019 Jul-Aug	LHA0340H: People and Power in Organizations; and
	LHA3004H: Research Literacy
2019 Fall	LHA3005H: Introduction to Research Methods
2020 Winter	LHA3006H: Research Methods II, or alternative
2020 May-Jun	Elective course*
2020 Jul-Aug	LHA3041H: Doctoral Seminar on Policy Issues in Education
	LHA3007H: Literature Review Course
2020 Fall	Elective course*
2021 Winter	LHA3003H: Research Proposal Development course
2021 Summer	Elective course*

\* 残り0.5フルコース（1ハーフコース）を満たすには、これら3授業科目から1つ選択すればよいことになる。

出典：[https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy/EdD\\_2019\\_Cohort.html](https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational_Leadership_and_Policy/EdD_2019_Cohort.html)（2019年7月9日採取）の記載内容をもとに、筆者作成。

#### (4) Ph.D.プログラム

Ph.D.プログラムの入学要件はほぼ Ed.D.と同様であるが、求められる修士課程での成績が Ed.D.では

<sup>15</sup> [https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy/EdD\\_2019\\_Cohort.html](https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational_Leadership_and_Policy/EdD_2019_Cohort.html)（2019年7月9日採取）。

「優秀な成績」とだけされていたのに対し、Ph.D.では「A-以上」と、M.Ed.の「Bの中以上」やM.A.の「B+以上」よりも明確に高い成績が求められることになっている。申請の際に要提出の書類もEd.D.と同じであり、在籍したことのある中等後教育機関発行の成績証明書、履歴書、推薦状2通（1通は学術関係者から、もう1通は教育専門職から）、志望理由書、学位論文を執筆することが可能であることを示す自分で執筆した補完的文書、等である。

Ph.D.プログラムに入学できるのはフルタイム学生か「フレックスタイム（flex-time）学生」とされている。フレックスタイム学生とは、就業中ではあるが、Ph.D.プログラムに入学することと自分が教育専門職に就いていることの関係性や、そこでの調査研究の必要性などについて証明することができた場合、認められる就学形態である。但し、時間的障壁を克服する能力が求められる。フルタイム-フレックスタイム間の移動はできない。また、Ph.D.-Ed.D.間の移動もできない。Ph.D.修了までの期間の上限は6年とされている。

修了するための要件もほぼEd.D.と同様で、要求されるコースワークと理解度テスト、研究計画書口頭試問、学位論文であるが、Ed.D.では要求されるコースワークが4フルコース（8ハーフコース）であるのに対し、Ph.D.では3フルコース（6ハーフコース）である。筆者がPh.D.の学生だった頃に見聞したところによると、Ph.D.はEd.D.よりも学位論文における学術性の高さが求められるため、学位論文の審査基準がより厳格である分、コースワークの数（負担）が少なくなっているということであったが、現在でもそれは同様であろう。

コースワークとしては、「LHA3040H 行政理論と教育問題 I -組織における人と権力-」は必修であり、その他に2つの調査方法に関するコースを修得することが求められる。但し、LHA 1003HとLHA 1004Hは修士課程の学生対象であるため、Ph.D.修了のための単位としてはカウントされない。残り1.5フルコース（3ハーフコース）のうち少なくとも0.5フルコース（1ハーフコース）はELPプログラムの授業科目番号3000あるいは6000レベルのスペシャルトピックから選択しなければならない<sup>16</sup>。

#### 4. 考察-M.Ed.・Ed.D.とM.A.・Ph.D.間の類似点と相違点に焦点を当ててー

ここまで、OISEのLHAE研究科ELP領域の各学位プログラムの概要を見てきた。本節においては、研究者向け学位プログラムと実践家向け学位プログラムでは、どのような類似点と相違点が見られるのかに焦点をあてて検討することとする。

##### (1) 入学要件と就学形態

入学要件に関しては、実践家向け学位プログラムも研究者向け学位プログラムも、大きな相違は見られなかった。トロント大学大学院に入学するには、まず大学院学部が定める『総合規則』にある、修士・博士プログラムそれぞれで求められる「最低限の要件」を満たす必要があり、そのうえで各研究科が設定する独自の要件を満たす必要がある。OISEのLHAE研究科ELPプログラムにおいては、修士号に関してはM.Ed.に求められる学士課程での成績が「Bの中」であるのに対し、M.A.では「B+以上」とされている。Ed.D.では「優秀であること」と抽象的な表現に留まっているが、Ph.D.入学要件は「A-以上」と明確に高く設定されている。この点だけを見ると、研究者向け学位プログラムの方が入学に際し好成績を求められる、つまり学業成績としてはより優秀であることが求められている可以说是言えよう。また、応募書類として双方ともに推薦状を、研究者から1通、実践家から1通、計2通提出することが

<sup>16</sup> [https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy/PhD\\_in\\_Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy.html](https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational_Leadership_and_Policy/PhD_in_Educational_Leadership_and_Policy.html) (2019年7月9日採取)。

求められるが、M.Ed.及びEd.D.では自分の職場の上司からの推薦状がまず求められており、そこでは受験者の実践家としての力量を記述することが求められている。特にEd.D.に関しては、リーダーシップの地位においてどのような成功体験を有しているのかが審査対象とされており、その点は、優劣ではなく、M.A.やPh.D.とは異なる審査基準が設けられているということであろう。いずれにせよ、実践家向け学位プログラムの入学に際して、申請時点までの申請者の専門性はどのような形でどの程度の評価対象となるのか、それはどのような基準で測定されるのか、現地調査において明らかにする必要がある。

申請の際に明示すべき就学形態としては、M.Ed.・M.A.の修士課程ではフルタイムでもパートタイムでも可であるが、Ed.D.及びPh.D.といった博士課程ではフルタイム（Ph.D.で認められる「フレックスタイム学生」は、授業料がフルタイム学生と同額であるため、ここではフルタイムに含む）のみが認められる。M.Ed.とEd.D.が実践家対象であり、M.A.とPh.D.が研究者対象であることは繰り返し述べているが、M.Ed.やEd.D.への入学希望者は、それゆえに実践家としての経験が入学審査で検討されることを勘案すると、基本的には教育に関わる就業経験がある、あるいは就業中であるということになるだろう。パートタイムであれば就業と就学の両立は形式上は可能であり、そのためM.Ed.はパートタイム学生の入学も認めているということであろう。しかし、Ed.D.へのパートタイム学生の入学は認めていない。逆に、M.A.とPh.D.は研究者向け学位プログラムであり、非常勤での就業経験はあったとしても正規での就業経験はもたない「学部→修士課程→博士課程」と進学してきた学生（日本の教職大学院の専門用語を応用すれば「ストレートマスター／ドクター」）が一定数を占めるだろう。この場合の学生は、本職がない、というか、本職が学生であるため、基本的にはフルタイム学生が多数を占めると考えても差し支えはないだろう。他方でEd.D.はM.Ed.と同様、入学審査に際しては教育職への就業経験が考慮されることとなっており、Ed.D.では特に「リーダーシップの地位における成功体験」が求められることになっている。しかし就学形態としてはフルタイムしか認めていないということになると、Ed.D.への就学を希望する就業中の実践家は、一度当該職を辞さなければならないということになるのだろうか。この点については、現地調査で明らかにする必要がある。

## (2) コースワーク

表4は必修の授業コース名が特定されているコース及び必修ではないが修得することが強く推奨されている授業コースの一覧である。必修科目は研究方法に関するもの・研究内容に関するものの順で、学位種別にM.Ed.のMRPオプション全3コース中1・1（必修ではないが推奨されるコースが研究方法で+1）、コース・オプション全2コース中1・1、M.A.全4コース中2・2（必修ではないが推奨されるコースが研究内容で+1）、Ed.D.全7コース中5・2、Ph.D.全3コース中2・1であり、全ての学位種において研究方法に関する授業コースの方が、研究内容に関するものよりも多く必修として設定されている。M.Ed.のコース・オプションでは実際にデータ収集する必要はないが、先行研究を分析する際に必要とされるリサーチ・リテラシーについては必修科目を設けている。Ed.D.に至っては、必修7コース中5コースが研究方法関連の授業である。つまり、OISEにおける実践家向け学位プログラムと研究者向け学位プログラムの必修授業における類似性としては、研究方法重視ということが言えよう。OISEが研究方法の教育を特に重視しているということは拙稿（平田、2020a）で既に述べた。重複になるがここで改めてOISEの教育的特徴に関する次の記述を引用しておくこととする。

### 調査方法論の授業

OISEは質的・量的及びその混合の調査方法論の領域において多くの専門性を有しており、入

門編から上級編にいたるまで、様々なプログラムを通して多様な調査方法論の授業を提供している。また、ある特定の事項や学問分野に特化した授業も行っている。多くのプログラムにおいて学生は課程を修了するために1つあるいは複数の調査方法論の授業を修得することが求められており、自分が受けているプログラムにおける要件を理解しておくのは学生の責任である。場合によっては、課程修了のために別のプログラムや研究科の調査方法論の授業を修得することもできるが、自分が所属するプログラム外の授業を履修する前に指導教員あるいはスーパーバイザーと協議することになっている。(OISE, 2019, p. 12)

表 4 学位別必修授業コース一覧

学位	オプション	研究方法関連	研究内容関連
M.Ed.	MRP オプション	LHA1003H 「リサーチ・プロポーザルをデザインする（修士） LHA 1004H 教育リーダーシップと政策におけるリサーチ・リテラシー（推奨）	LHA1040H 「教育リーダーシップと政策」入門
	コース・オプション	LHA1004H 教育リーダーシップと政策におけるリサーチ・リテラシー	LHA1040H 教育リーダーシップと政策」入門
M.A.		LHA1003H リサーチ・プロポーザルをデザインする（修士） LHA1004H 教育リーダーシップと政策におけるリサーチ・リテラシー	LHA1040H 教育リーダーシップと政策入門 LHA1041H 教育リーダーシップと政策 2（推奨）
Ed.D.		LHA3004 リサーチ・リテラシー LHA3005H 調査方法入門 LHA3006H 調査方法 II LHA3007H 先行研究のレビュー・コース LHA3003H リサーチ・プロポーザル開発コース	LHA3040H 組織における人と権力 LHA3041H 教育における政策問題に関する博士課程演習
Ph.D.		調査方法関連コース（コース名の特定はなし） 調査方法関連コース（コース名の特定はなし）	LHA3040H 行政理論と教育問題 I

出典：(OISE, 2019) 及び ELP ウェブサイト

([https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational\\_Leadership\\_and\\_Policy/index.html](https://www.oise.utoronto.ca/lhae/Educational_Leadership_and_Policy/index.html)) の記述を基に、筆者作成。

他方で、次のような相違点も見られる。第一に、必修授業数の違いである。即ち、それぞれの学位プログラムにおける必修授業数は、M.Ed.の MRP オプションで4フルコース、コース・オプションで5フルコース、M.A.で4フルコース、Ed.D.で4フルコース、Ph.D.で3フルコースと、実践家向けプログラムの方が多くなっている。また、上述の通り、Ed.D.ではその他の学位よりも多くの研究方法に関する授業が必修化されているが、それは、M.Ed.プログラムでは学位論文は修了要件とはなっていないことが影響していよう。つまり、M.Ed.プログラムでは MRP オプションはあるものの、それでも学位論文執筆時に求められるほどの研究方法に関する知見は求められておらず、そのため Ed.D.で初めて学位論文執筆

筆にとりかかることになる。故にそれに特化した授業を特定の履修する必要があるということが、その根拠であろう。逆に Ph.D.に入学するのは M.A.を取得している必要がある、つまりすでに学位論文執筆済みの者であるため、博士論文において修士論文以上に求められる知見について上積みすれば足りる（基礎部分はすでに身に付けていると想定される）、そのため授業名を特定した必修数が少ないということであろう。また、筆者の研究上の経験に鑑みると、学位論文の性質においても両者には違いがある。即ち、筆者はこれまで Ed.D.の学位論文も Ph.D.の学位論文も、多くとは言わないが、複数読んできた。その経験からすると、Ph.D.の学位論文の方が Ed.D.のそれよりも、先行研究のレビューなど理論的側面の探究がより深くなされる傾向にあるという印象を受けている。逆に Ed.D.の学位論文は理論研究はそれほど深くはないが、その多くが現職教員であるという特性を活かし、研究対象としている事例により深く入り込み、その分詳細で豊かなデータを提示している傾向にあるものと思われる。また、より深く先行研究を検討しているがゆえに、Ph.D.論文の方が研究対象から得られたデータをより一般的な文脈に位置づけようという指向性が、Ed.D.論文よりも強いように見受けられる。他方で実践家向け学位プログラムにおいて求められる研究成果が、自らの現職教員としての経験と状況により特化した形で提示されるというのは、言ってみれば自然なことでもあろう。但し、これは推測の域を出ないため、現地調査で明らかにする必要がある。

### (3) 修了要件（コースワークを除く）

修了要件に関しては、M.Ed.以外の学位プログラムではすべて学位論文の執筆が求められる。M.Ed.に関しては、以前はオプションⅢ (Option III) として「コースワーク＋学位論文 (Coursework + Thesis Option)」オプションもあったが、2018－2019 年度一杯で廃止されたということである。ELP の担当者によると<sup>17</sup>、学位論文の執筆は M.A.の学位取得過程でも求められるものであつて、M.A.と M.Ed.を差異化するためにオプションⅢは廃止した、ということであつた。この点については、昨年度 (2018 年度) に行ったブロック大学 (Brock University) 調査において、興味深いことが指摘されていた。即ち、ブロック大学大学院の M.Ed.プログラムにはコース・パスウェイとリサーチ・パスウェイがあり、後者はまた MRP オプションと学位論文オプションに分割される。学生はこれら 3 つのパスウェイ・オプションから 1 つを選択し、学位取得を目指すことになる。調査協力者の当該プログラム担当教員は、本来はリサーチ・パスウェイ (学位論文オプションあるいは MRP オプション) が望ましいが、近年多くの学生がコース・パスウェイを選択する傾向があり、それはコース・パスウェイの方がリサーチ・パスウェイよりも比較的容易に学位取得できると認識されているから、と述べていた。そしてコース・パスウェイを廃止した場合、学生がコース・パスウェイと同様の学位取得プロセスを有している大学に流れてしまうのではないかと、いうことを危惧し、より望ましくはないと認識しつつ、これを保持していた (平田, 2019)。OISE が世界でも有数の教育学系研究機関・大学院であることは上述した通りだが、他方でブロック大学はオンタリオ州内でも中規模の大学である (と言っては失礼だが)。同州の M.Ed.プログラムに関わる学生獲得競争がどれほど激烈かは不確かだが、この点は今後の現地調査において確認しておく必要がある。

また、M.Ed.では学位論文の執筆が要求されない。前出の担当者によると、その理由は M.A.では学位論文執筆が必須であり、M.Ed.ではこれと差異化を図る必要があるから、というのがその根拠であるようだが、だとすれば Ed.D.の学位取得に際しても、Ph.D.では学位論文が要求されるからこれと差異化を図るために学位論文の執筆を要件としないという選択肢は、論理的にはあり得よう。この点が OISE に

<sup>17</sup> 担当者には 2019 年 7 月 2 日に E メールで質問し、翌 3 日に回答を受け取った。担当者の氏名はプライバシー保護のため、ここでは特定しない。

においてどう認識されているのか、現地調査を通して明らかにしたい。

## 5. 現地調査に向けての展望—結論に代えて—

以上、OISE の LHAE 研究科 ELP における学位プログラムの類似点と相違点について検討してきた。今後は、昨年度行ったブロック大学調査、そして今回まとめた拙稿（平田，2020a）及び本稿で得られた知見を基に、今年度実施する予定である OISE での現地調査の準備に入ることになる。準備段階の一部としての本稿では、教育実践家向け学位プログラムと研究者向け学位プログラムの類似点と相違点に着目して考察してきたが、ここではそれ以外の観点をもう1つ示すことによって本稿を閉じることとした。それは、教育実践家向け学位プログラム内の類似性と相違性、つまり、M.Ed.学位を取得した学生が、Ed.D.学位取得を目指す動機づけの問題である。

ブロック大学調査においては、現職教員が M.Ed.の学位取得を目指す動機づけとして「昇給」と「管理職となるための資格要件の1つを満たす」ということが挙げられた（平田，2019）。前者について見てみると、オンタリオ州の公立小学校教員に関しては、「オンタリオ州品質評価協議会（Quality Evaluation Council of Ontario: QECO）」が定める給与基準によると、最高レベルである「カテゴリーA4」に分類されるための要件としての18の選択肢のうち2つにおいて「博士号（doctoral degree）」が言及されるに留まっている。それも「修士あるいは博士の学位（master or doctoral degree）」であって、必ず博士号でなければならないというわけではない。また「オンタリオ州中等学校教員組合（Ontario Secondary School Teachers' Federation: OSSTF）」策定の給与表においては、これも最高レベルを意味する「グループ A4」に分類されるための選択肢の中に「修士」とともに「Ph.D.」という特定の博士学位名は出てくるが、より一般的な「博士号」あるいはもう一方の特定の博士学位名である「Ed.D.」という表現は出てこない（平田，2020b）。また後者の管理職となる資格要件としては、「1996年オンタリオ州教員協会法（the Ontario College of Teachers Act, 1996, S.O. 1996, CHAPTER 12）」に基づいて制定されている「オンタリオ州規則176/10 教員資格（Ontario Regulation 176/10 Teachers' Qualifications）」第32条において、オンタリオ州において学校管理職となるために修了しなければならない「管理職資格プログラム（Principals' Qualification Program: PQP）」パートI受講の要件として「博士の学位」に言及されているが、これは「修士の学位」でも代替可能であり、「修士では不十分であり、特に博士の学位が必要」という趣旨のものではない（平田，2020c）。つまり、昇給や管理職になるために M.Ed.の学位取得を目指すという動機付けに関しては説得力があるが、「それなら M.Ed.で十分であり、Ed.D.入学を目指すということは多くの場合 M.Ed.はすでに取得済み（あるいは取得見込み）のはずである。つまりそれ以上の昇給や昇任が特に約束されているわけではないのに、なぜ、プライベートな時間を削って、身銭を切って、多くの労力を使ってまで、Ed.D.の学位取得を目指すのか？」という疑問は残る。この問題を、現地調査を通して明らかにする問いの1つに追加することで、本稿を閉じることとしたい。

## 【参考文献】

- ・ 平田淳（2019）「カナダ・ブロック大学大学院における M.Ed.プログラムの実態の諸側面—担当教員の認識に関する質的分析—」『佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要』第3巻，69—91頁。
- ・ 平田淳（2020a）「トロント大学オンタリオ教育研究所（Ontario Institute for Studies in Education of the University of Toronto）における研究科と学位プログラムの制度設計」『佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要』第4巻，110—127頁。

- ・ 平田淳 (2020b)「カナダ・オンタリオ州における教員給与制度に関する一考察」『佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要』第4巻, 40－63 頁。
- ・ 平田淳 (2020c)「カナダ・オンタリオ州における管理職資格プログラムに関する一考察」『佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要』第4巻, 88－109 頁。
- ・ OISE. (2019). *OISE Graduate studies in education bulletin 2019-2020*. Retrieved June 26, 2019, from the World Wide Web: <https://ro.oise.utoronto.ca/Bulletin.pdf>.

#### 【附記】

- ・ 本稿の脱稿は2019年7月31日であるため、その後に何らかの制度改革があったとしても、それは本稿には反映されていない。
- ・ 本稿は、科学研究費補助金（基盤研究(C)（一般） 課題番号 18K02283）「カナダの大学院における教育専門職向け学位プログラムの教育効果に関する調査研究」の研究成果の一部である。

(2020年1月31日 受理)